「オーロラの娘」（一九〇一）

「おめえみたいなごろつきが、あたいと結ばれてえなどと、よく言うよ。顔を洗って出直しな！　旦那なんて、とんでもねえ！」

このように、ジョイ・モリノは腹の底からジャック・ハリントンを怒鳴りつけた。そのようなことを、前の晩、ルイス・サヴォイにも告げておいていた。ただそのときは、もっとありふれた言い方で、しかも相手の方言を使って、胸の思いを伝えておいた。

「なあ、ジョイ、おれの言い分も聞いてよ」

「だめ、だめ！　なんだって、ごろつきの言い分を聞かなきゃならねえんだよ。まったく、話にならねえよ。おまえは、あたいの家の前をたむろし、やって来ても、何にもしやしねえ。どうやって、おまんまを食うんだい。なんで、砂金を見つけねえんだい。ほかのやつらは、わんさと見つけてるぞ」

「ジョイ、でも、おれは頑張ってるんだよ。山や川を毎日駆け巡って、砂金を探してるんだ。今日も、先ほど帰って来たばかりさ。おれの犬たちは、いまだにぐったりしている。ほかの奴らは、まぐれで沢山の金を見つけることができただけなのさ。おれにはたまたま、今回は幸運の女神が来なかっただけさ」

「そうかな。でも、インディアンのおっかあをもらった奴は―そうそうマコーマックだな―クロンダイク地方で金鉱を掘りあてたよな。あのとき、おめえは行かなかった。他の奴らは出かけて行って、今は金持ちになってるぜ」

「あのときおれは、タナナ川の上流のあたりを試堀(しくつ)していたんだよ」と、ハリントンは異議を唱えた。「だから、エルドラロ川やボナンザ川沿いの金鉱のことはまったく知らなかったのさ。あとの祭って、ことだよ」

「そうじゃねえ。勘違いもいいとこだってんだ」

「なんだって?」

「まったくの勘違いだって。ここだけの話なんだけどさ、あとの祭りじゃなく、今からでも十分に間にあうってんだ。とっても有望な金鉱があるんだ、エルドラロ川の入り江にな。そこへ杭(くい)を打ち込んで、突然、姿を消した奴がいるのさ。そいつの消息を知っている者は、誰一人としていないんだ。だからよう、奴がもどってくることは、まあないと思うんだ。だがよう、もう二ヶ月間もその金鉱の採掘権請求書をだした奴はいねえんだ。そこで、多くの奴が、採掘権請求書を作ろうってのさ。他の者より一刻も早く、書類を提出してえ、その金鉱を自分の物にして金持ちになろうと、躍起になってるんだよ。そうすりゃよう、おまんまがたらふく食えるってことさ。」

ハリントンは、乗り気であることをできるだけ悟られないようにして訊いた。
「請求期限はいつ切れるだい？　どこの鉱区だって？」
「ルイスにさ、そのことをゆうべ話したんだけど…」と、彼女は彼の問いかけを無視してしゃべり続けた。「あたいは、あいつが一番乗りだと思うんだよ」
「ルイスだって！　こんちくしょう！」
「でさ、ルイスはよ、ゆうべあたいの小屋で言ってたんだ。『ジョイ、おれは腕っぷしが強く、いい犬もたくさん持っているんだ。丈夫で長持ち、ってことさ。だから、採掘権争いには、おれが勝つよ。そうなったら、おれの嫁になってくれるだろう？』ってね。でさ、あたいはルイスに言ったんだ。あたいは―」
「で、何て言ったの？」
「あたいはさ、『そうなったら、嫁になってあげてもいいよ』って、言っておいたんだ」
「ルイスがこの勝負に負ければ、どうなるんだい？」
「だったら、当然あたいと結ばれねえよ」
「おれが勝てば？」
「おまえが勝つだと！　わはは！　ばかだね、おまえは」
ジョイ・モリノの笑い声は、しゃくにさわるも

のであったが、ハリントンの耳にはここちよかった。男のプライドを傷つけられたことを、まったく気にもしていなかった。結婚を断られることは、もう慣れっこになっていたからだ。このことは、他の男たちにも共通していた。彼女に言い寄ってきた男どもは、みんな同じやり方で今までずっとやり込められてきたのだ。反感をおぼえるどころか、その時、彼はジョイがとても魅惑的な女に思えたのだ。霜が唇にまとわりついた状態でうっすらと開き、顔が赤く染まり、眼にはこのうえもない女の色気がただよっており、ぞくぞくするような興奮をおぼえた。また、粗い長毛でおおわれた毛むくじゃらのそり犬が、彼女のまわりに群れをなして身を寄せており、先導犬の白牙(しろきば)が、鼻の下を長くして、膝の上で寝そべっている。

「おれが勝ったら、どうしてくれるんだい?」とハリントンは執拗に訊いた。

彼女は視線を犬からハリントンに移したが、すぐに視線をもどして白牙に尋ねた。

「おまえはどう思う? こいつが腕っぷしが強く、採掘権請求書をだせば、結ばれてやってもいいかね。いいか?」

白牙は怒って耳を逆立て、ハリントンに向かって、ウウッとうなり声をあげた。

「ひでえ、寒さだ」と、ジョイ・モリノは女性にありがちなことだが、無関係なことを不意に言い

だし、立ちあがり、犬を一列に並べた。
ハリントンはただその光景を、じっと眺めているだけだった。以前からジョイはこのように煙にまくことがあり、忍耐が彼の美徳になっていたのだ。
「帰るぞ、白牙！」と、彼女は大声で命令を発し、そりに飛び乗ると、急に走りだした。「それっ進め！」
ハリントンは、ジョイ・モリノがフォーティ・マイルに向かって雪道を勢いよく走り去っている姿を、じっと横目で眺めていた。彼女は、フォート・カダイにつながっている分かれ道を通り川を横切ると、そり犬を止め、振り向いた。
「おうい、ごろつき様よ！」と、大声でどなった。白牙が、いいと言っているよ！　ただし、おめえが勝ったらの話だがよ！」
だがどういうわけか、よくあることだが、うわさはフォーティ・マイルじゅうに広まり、一それまでは、ジョイ・モリノが二人の求婚者のどちらを選ぶか、人々はあれこれと気をもんでいたが、一今やどちらが採掘権争いに勝つかに賭けたり、思いを巡らすようになった。意見は真っ二つに分かれ、彼らはお気に入りの男が勝つようにあらゆる協力を惜しまなかった。町一番の優秀犬の争奪戦が繰りひろげられた。勝利するためには、犬そ

れも最高の犬が不可欠であったからだ。この闘いに勝利することは、とても重要な意味をもっていた。妻を獲得するということに加えて、一前代未聞のことであるが、一少なく見積もっても百万ドルの金鉱を手にすることができるのだ。

ボナンザ川沿いの金鉱をマコーマックが掘りあてたといううわさが広まった秋、サークル・シティやフォーティ・マイルを含むローア・カントリの人々が、ユーコン川上流に殺到した。が、遠く離れている西部で試掘していたジャック・ハリントンやルイス・サヴォイのような者は、その恩恵にあずかることはなかった。巨大なヘラジカが住む牧草地や小川に、見境もなく行き当たりばったりに杭が打たれていた。エルドラロ川流域に関しては、金鉱がある可能性はほとんどないとされていたが、とりあえず杭が打ち込まれた。そして、川の流域五百マイル（約八百キロメートル）にわたる金鉱の採掘権請求書を、オラフ・ネルソンが提出し、正式に掲示板が立てられていた。ところが、彼は権利を放棄して、そこから姿を消していたのだ。その頃、最寄りの登記所は、フォーティ・マイル川を渡ったところにある、フォート・カダイの警察の仮設小屋にあった。エルドラロ川流域が金鉱の宝庫であるという噂が知れわたると、オラフ・ネルソンはユーコン川をくだって財産の登記を行っていないことがすぐに知れわたった。

人々はその持ち主のいない鉱区、―シャベルと洗鉱おけだけで百万ドルが約束されているので―の獲得に目の色を変えた。だがその鉱区をすぐに採掘することは行われなかった。杭打ちと登記の間には六十日の期間が法律に明記されており、その間に杭を新たに打ち込むことはできないことになっていたのだ。ローア・カントリじゅうの人々は、オラフ・ネルソンが採掘予定地から姿を消しているということを承知しており、何十人という男たちが固唾を呑んでフォート・カダイの登記所を目指す準備をし、来るべき競争にそなえていた。

だが、フォーティ・マイルでは、競争相手が限られていた。人々はジャック・ハリントン陣営とジョイ・モリノ陣営に分かれてそれぞれ準備に余念がなかったので、独力で採掘権獲得競争に加わろうとは誰も思わなかったのだ。登記所までは百マイル（約百六十キロメートル）の直線コースであったので、二人の優勝候補たちはどちらも、雪道のコースに沿って四組の換え犬を配置するようにもくろんだ。当然、最終組の出来が勝利の鍵を握っていると考えられるので、各陣営の支持者はこの二十五マイルのコース用に最強の犬を手に入れようと躍起になった。両派の最強犬獲得競争は次第に激しくなり、犬の価格は高騰し、その地方の記録を更新した。たまたまこのことがきっかけとなり、犬の争奪戦に関してジョイ・モリノの動

向にそれまでにもまして一般に人々の視線があつまるようになった。彼女がその争奪戦の張本人であるばかりか、チルクートからベーリング海までの最良のそり犬を所有していたからであった。そのなかでも、そりに一番近いところに配置される先導犬として、白牙に匹敵する犬は他のどこを探しても見あたらなかった。だから、この犬に最終組を任せる者が勝利することは火を見るよりも明らかで、疑いの余地はまったくなかった。ところが、その地域の人々は、自然淘汰の法則と犬価格の天井知らずの高騰からして、どのように行動すれば最も有利かという基準を生まれつきもっていたので、ジョイ・モリノが白牙の使用申し出で悩まされることは一度もなかった。こちらの陣営がその犬の恩恵を受けなければ、相手の陣営も受けることはないだろう、と両派の男たちは自らを慰めていたのだ。

しかし、男という者は、個人であっても集団であっても、女の心の奥深いところにある微妙な感情に、おめでたいほど無頓着のまま一生を過ごすように創り出されている。だから、フォーティ・マイルの男は、ジョイ・モリノの内なる魔性を見抜くことが到底できなかったのである。この黒い眼をしたオーロラの娘の本性を理解することはできなかった、と後になって告白している。彼らが極北の地を侵略することなど考えつかない時代に、

彼女の父親はその土地で毛皮の商いをしていた。また、彼女自身はきらめく北極光を見つめていたのである。それもそうだが、女としてこの世に生を受ければ、その遺伝子は生涯変わることなく、女として男を理解し受け入れることもあるのだ。ジョイ・モリノが何人もの男と恋の戯れを楽しんでいるのを人々は承知していたが、その裏に潜む賢明さや巧妙さには誰も考えが及ばなかった。彼女の外面的な振る舞いのみに、心を奪われていた。最後の最後まで人々は、興奮状態と錯乱状態が入りまじった状態であった。争奪戦の最後の切り札を握っているのはジョイ・モリノであり、彼女がそれがそれを投入してはじめてこのレースの勝敗が決まるのだ。

その週の初めに、ジャック・ハリントンとルイス・サヴォイの両陣営は、いよいよ採掘権獲得競争のためにフォーティ・マイルを出発した。抜け目なく時間の余裕をとり、オラフ・ネルソンが姿を消した鉱区の採掘権の消滅する数日前に現地に到着していようと考えたのだ。そうすれば、十分に休養がとれ、争奪戦に参加する犬も好スタートがきれる。途中、ドーソンからやって来た陣営は、予備の犬を雪道沿いにすでに配置していた。採掘権が手に入れば何百万ドルにもなる争奪戦からすれば、そのような出費は取るに足りないものであると考えたのだろう。

争奪戦に参加しているすべての陣営がスタートして二日目、フォーティ・マイルの両陣営は、順次、目的地から七十五マイル地点、五十マイル地点、そして二十五マイル地点に換え犬を送り始めた。最後の直線コース用に配置された橇犬(そりいぬ)は見事な犬ばかりで、どちらの陣営が有利か甲乙つけがたい状態であった。というのも、争奪戦にだすかどうか決めるまでに、零下五十度の雪道でまる一時間もかけて橇犬の能力を比較検討していたのだ。いよいよ両陣営がスタートしようとしていたまさにその時、ジョイ・モリノは橇に乗って観客の間をかき分け、ハリントン陣営のチーム責任者であるロン・マクフェインに近づき、耳元で何ごとかささやいた。彼はたった一言聴いただけで、ものすごく素晴らしいことを予感して、素早く下顎を下ろし、ニタッとした。ロン・マクフェインはジョイ・モリノの橇から白牙を解き放ち、ハリントン陣営の橇の先頭に配置し、最後の橇犬の一隊をユーコン地方の最終コース出発点に向かわせた。

「ルイ・サヴォイの運命もこれで地に落ちるぜ」

という声が飛びかった。だが、ジョイ・モリスは挑戦的な黒い目をぎらつかせ、父親の小屋に引き返したのだった。

オラフ・ネルソンの採掘予定地に、競技開始時間の真夜中が近づいていた。数百人の競技関係者

たちは、暖かい小屋や快適な二段ベッドがある室内にいるよりも、零下六十度の雪道で跳びまわりたい誘惑にかられた。実際、百人ぐらいが戸外に出て、掲示板を用意し、犬を整列させていたのだ。コンスタンチンという警察署長率いる騎馬警官の一隊が、競技を公平に行うべく出動を命じられていた。日が変わるまでは、採掘鉱区に杭を打ち込むことも含めて競技を絶対に開始してはならない、という命令が発せられてもいた。極北の地では、そのような命令は、唯一絶対の神による命令と同様に、即効性があり、とてつもなく強力なものなのだ。競技会場は、快晴で寒さが厳しさを増しており、頭上では、北極光がドキドキするような色の饗宴（きょうえん）を繰り広げていた。寒々とした空には、目にも鮮やかなバラ色の光の波動が、天頂に向かって大きな弧を描きながら伸びている。また緑色がかった白いキラキラした大きな光の束が星をすっかり覆っており、その光景はまるで巨大な神が北極の空に手を伸ばし高くそびえ立っているかのようだ。そして、このような壮大な自然のパノラマに向かって、エスキモー犬どもは、先祖の狼のごとく遠吠えをする。

黒毛皮製の高帽をかぶった警官が、手に時計をもって最前列に威勢よくやって来た。すると競技参加者たちは、犬の間を駆け回り急いで立ち上がらせ、引き綱のもつれをほどき、一列に整列させ

る。いよいよ「位置について！」の合図で、参加者はスタートラインへと進み、杭と掲示板を握りしめる。彼らは払い下げ鉱区の境界線を何回も通り越していたので、その先は目隠しをしても迷うことなどないぐらいであった。警官が片手をあげると、余計な毛皮や毛布を放り投げ、最後にベルトをしっかり締める。

「用意！」という声が響きわたると、総勢六十人の競技者は手をひろげ、柔革靴（モカシン）が雪道をぐっと踏みしめる。

「ドン！」

参加者たちはまず広々とした鉱区に勢いよく飛び出し、次にその四隅を巡回しながら掲示板を立て、そして鉱区の中心点に向かいそこに二本の杭を突きさす。それから凍りついた河床に待機してあった橇に急行する。すると激しい音を伴ったぶつかり合いにより、大混乱になる。橇と橇が衝突し、犬はたてがみを逆立て牙をむき出してうなり声を上げるのだ。犬むちは人と犬の区別なく打ちおろされる。さらに、各参加者に付き添っている仲間の一団が、混乱状態の中から必死になって助けだそうとするので、事態はより深刻な状態になってしまう。だがしばらくすると、橇は一台ずつ強引に引っぱり出され、張り出した堤を全速力で走り抜け、遙かかなたの暗闇の中に消えて見えなくなった。

だが、ジャック・ハリントンはこのような混乱を予期していたので、事態が収拾に向かうまで自分の橇のそばで待機していた。ルイス・サヴォイはこの敵手に橇犬の扱いにかけては一目置いていており、後方についてやはり待機した。そして、他の参加者の叫び声が聞こえなくなってから、ようやく彼らのあとを追った。この二人の男が一列に整然と疾走している先頭グループに追いついたのは、ボナンザ地方に向かって十マイル（約十六キロ）ほどしてからであった。音もほとんど立てずにいるこの時点では、お互いを引き離すことは至難の業であった。橇の幅が十六インチ、雪道の幅は十八インチで、しかも雪道は先に行く橇により一フィート（約三十センチ）も完全に埋没しており、それはまるで溝のようであったのだ。さらに両側は、柔らかい雪の結晶で一面が覆われていたのだ。もしも他のチームを追い越そうとしてこの雪の結晶にぶつかると、橇犬どもは腹のあたりまで入ってもがくことになり、そのため速力が急激に落ちてしまい、カタツムリのごとくのろのろとしか進めなくなる。このようなことから、男たちは猛烈なスピードで疾走する橇に接近したままで、機をうかがっていた。

ボナンザ地方からクロンダイク地方、そしてユーコン川の合流点であるドーソンまでの十五マイル（約二十四キロ）では順位の変更はなかった。ド

ーソンでは、多くの換え犬の第一組が待機していた。ところが、ハリントンチームとサヴォイチームは、必要とあらば先頭グループの犬どもを殺しかねない勢いで、他のチームの二マイル先に彼らの換え犬を配置していた。ドーソンでの橇換えの混乱に乗じて、二人の男のチームは、他のチームの少なくとも半数は追い越していた。それでも、ユーコン川の湾曲した幅広いところに向かって疾走していたときには、まだ前に三十チームがいただろう。この地帯はまさに難所で、白熱した競争が繰りひろげられることになる。川が秋に凍結した際に、巨大な氷の塊の間に一マイルにもわたる広大な水面が未氷結のままになっていた。この流れが速い部分もつい最近凍結してしまい、今ではダンスホールのように平らで硬く滑りやすい状態になっっていた。ハリントンはこのキラキラ光る氷の表面に出くわすと、膝を曲げ不安定な格好になりながらも片手でそれを押さえバランスをとり、もう一方の手で猛烈な勢いで橇犬に鞭を打ち、罵声を浴びせた。この滑らかな氷が広がるところでは、他のチームも全力をあげて疾走した。が、極北の地では、ハリントンほど犬さばきが見事な者はあまりいない。すぐに彼は前方に躍り出ることになる。ルイス・サヴォイも速力をあげ、必死にハリントンの後を追い、先導犬は相手の橇の尾部まで迫っていた。

鏡のように滑らかな直線コースにさしかかると、二人の換え犬が川岸から猛スピードでやって来た。だが、ハリントンは手綱(たづな)をゆるめることはなかった。新しい橇が勢いよく近づいてくる好機をとらえ、それに飛び乗り、元気いっぱいの橇犬にさらに鞭を打ち速度をあげるのだった。その新しい橇に乗っていた男は、かろうじて飛び降りることができた。サヴォイも同様の行動をとった。置き去りにされた二人のチームの橇と犬どもは、コース上で右往左往し他のチームと衝突した。その結果、氷の上が橇や犬などで山のようになり、大混乱になった。ハリントンは速度を上げ、サヴォイも必死にその後を追う。彼らが鏡のような氷のはずれに近づくと、先頭を行くチームに追いつき並んだ。そして、柔らかい雪の吹きだまりの間にある狭いコースを疾走するころ、レースの先頭を切っていた。オーロラの光のもとで見守っていたドーソンの人々は、彼らの見事な奮闘ぶりに感心し、もうこれで二人の優勝争いになると確信した。

零下六十度の寒さが骨身にしみるほどの状態になると、人間は身体を温めたり激しい運動なしには、長時間生存することはできない。だから、ハリントンとサヴォイも昔ながらの「乗っては走る」習わしを始めた。二人はそれぞれ革の引き綱をつけたまま橇の後ろに飛び降り、血液が本来の状態になり身体が十分に温まるまで走り続け、また熱

気が身体からなくなるまで橇に乗って疾走するのであった。このように乗っては走りを繰り返しながら、彼らは第二・第三乗り継ぎ地点を走破した。コースがつるつるの表面で覆われていたので、サヴォイは何回か橇犬に激しく鞭を打ったが、先頭を行くハリントンのチームを追い抜くことは、たいへんまれなことであった。後方に五マイル（約八キロ）にわたり連なっていた他のチームは、この二人を追い抜こうと必死になったが、それもうまくいかなかった。ジャック・ハリントンチームの猛烈な速度に太刀打ちできるのは、ルイス・サヴォイをおいて他にはいなかったのだ。二人が最後の七十五マイル乗り継ぎ地点に突進してくるまさにその時、ロン・マクフェインという男が猛烈な勢いで併走してきた。彼の橇を先導する白牙にハリントンが気づくと、この競争の勝利者は自分であると確信をした。極北の地のどのチームも、あと二十五マイルで追い抜くことなどありえない、と思ったのだ。ルイス・サヴォイは白牙が相手のチームの先導犬になったことを目にして、女々（めめ）しく自虐的な言葉を心のなかで叫んだ。けれども、彼は万に一つの好機があることを信じ、相手が雪しぶきを立てて突っ走る後を執拗（しつよう）に追いかけるのだ。東南の空から夜が明け始めるなか、二人の男は最後のデッドヒートを演じていた。その頃になってやっと、ジョイ・モリノの仕業（しわざ）に気づき

驚嘆(きょうたん)するのだった。一人は喜びの絶頂にあり、もう一人は悲しみのどん底にあった。

フォーティ・マイル地方の人々は、早朝にもかかわらず毛布の寝袋から這(は)い出し、最終コース地点近くに群がった。ちょうどその辺りから、数マイル離れたユーコン川上流の最初の湾曲部まで見渡せるのだ。また、川の向こう側にあるフォート・カダイのゴール地点をも視界に入るので、金鉱登録官が待機している様子が分かる。ジョイ・モリノはというと、競技コースから十数キロ離れた地点にいたので、他の人々に邪魔をされる心配はなかった。だから、最終直線コースと彼女の間には、誰一人妨げる者はいなかったのだ。人々の周りには焚き火がたかれ、砂金を用いて橇犬の賭(かけ)が行われていた。もちろん、白牙には桁外れの砂金が賭けられていた。

「やって来たぞう!」と、松の木のてっぺんに登っていたインディアンの少年が、かん高い声を発した。

ユーコン川の上流から、一つの黒い点が吹雪の中から現われ、二つ目の点がすぐ後に続いていた。だが、これらが徐々に大きくなり、それぞれの黒点がさらに多くの点になるにつれ、第一グループと第二グループの間にはかなり差があることが分かった。またしばらくすると、二つのグループ内

の全容が明らかになり、犬や橇、そして橇の上にまたがる男たちの姿を目にすることができた。「白牙が先頭を走ってるぜ！」と、警察署長がジョイにささやいた。すると彼女はうれしそうに微笑んだ。

「十対一でハリントンの勝ちだな」バーチ川の成金男が砂金が一杯入った大袋を引きづりながら叫んだ。

「奥さんからたんまり砂金をもらわなかったのかい」と、ジョイは警察署長に訊いた。

警察署長はうなずいた。

「でもちょっとは砂金を持ってるんだろう。いくら持っているんでえ」ジョイはひつこく問いただした。

すると彼は砂金を袋から取り出した。彼女はその額を一目で見積もり、次のように不可解な笑みを浮かべて言った。

「二百ドル、ってとこかな。いいじゃないの。ここだけの話だがね、この砂金を全部ハリントンに賭けるといいぜ」警察署長は、あれやこれやと思案しながら、雪道の最終滑走路に視線を移した。

二人の男が橇の上で膝を伸ばして中腰になり、犬どもに激しく鞭を打ちつけていた。ハリントンがリードしている。

「十対一でハリントンに賭けるぜ！」と、例のバーチ川の成金男が警察署長の目の前で砂金が入っ

た大袋を振り回し大声で叫んだ。
「おめえさんも、そうしな」と、ジョイは促した。
彼はもう降参だ、というように肩をすくめて、彼女の言うとおりにした。だが、それは自分の理性に従ってのことではなく、ジョイの魔性に負けてのことだった。彼女は、それでいいんだ、というように警察署長にうなずいた。
レースを大声で応援していた群衆の声ははいっせいに止み、二人の男に賭ける砂金が入った袋を置く音だけがしばらくの間、聞こえてきた。
橇は風を背にした小型帆船のようによろよろと前後左右に揺れながら、彼らの方に向かって猛スピードで近づいてきた。ルイス・サヴォイは依然として先導犬をハリントンの橇の尾部につけていたが、勝利の女神から見放されているようだった。ハリントンは真一文字に口を結び、まっすぐ前を向いて疾走していた。彼の橇犬どもは、しっかりした足取りで雪道を踏みしめ、完璧なリズムをとりながら飛び跳ねる。白牙は、軽く鼻を鳴らしながら頭を低くし脇目もふらずに、自分の仲間の橇犬どもを見事に先導している。
フォーティ・マイル地方の人々は、固唾を呑んで見守っている。そのような静けさの中、橇の滑走部が雪道と接触する音と鞭の音だけがこだまする。
その時、ジョイ・モリノの澄み切った声が、あ

たり一面に響きわたる。「やあ、白牙！　白牙よ！」

白牙はその声を聞くと、急にコースを外れ飼い主に向かって突進してくる。それにつれて先導する橇や犬どももついてくるのだ。橇の片側が一瞬宙に舞い、ハリントンは雪の中に投げ出される。その隙に、サヴォイはあっと言う間に先頭に躍り出る。ハリントンは足を引きづりながら立ちあがり、相手が橋を渡り金鉱登録所へと軽快に滑走している姿をじっと見つめる。すると、いやおうなしにある声がハリントンの耳に入って来た。

「ああ、やはり白牙は、大したもんだ」ジョイ・モリノは、警察署長に話しかけていた。「何というか、白牙はいつも先頭を行くんでえ。最高の先導犬だぜ」

資産家のお嬢様 一

一幕劇（一九一五）

登場人物

John Masterson（ジョン・マスターソン）

Frank Burt（フランク・バート）

Police Officer（警察官）

Edna Masterson（エドナ・マスターソン）

場面

アメリカ合衆国ニューヨーク市にあるマスターソン家の書斎にて。豪華な家具付きの広い部屋。テーブル。卓上電話。暖炉。暖炉のそばに大きな椅子。書棚。ドア。ソファ。玄関。

背景。

幕が開くと、ジョン・マスターソンがひじ掛け椅子に寝そべっている。掛け時計が午前二時を知らせる。娘のエドナが玄関に現われる。部屋に入り、聞き耳を立てる。窓に掛かっているカーテンを引く。テーブルの上に置いてあるタバコを取り上げ、火をつけようとする。父親が目を覚ます。エドナはびっくりしてタバコを落とす。

マスターソン：誰？（ひじ掛け椅子から振り向く。

エドナを見る）ああ、いつ帰ってきたの？
エドナ：お父様、ただいま帰って参りました。びっくりさせないで下さいませ。（もう一本タバコを手にする）
マスターソン：新聞を読みながら眠ってしまったようだ。今、何時だい？
エドナ：午前、二時ですわ。世の中のお父様方がベッドでぐっすり眠っておられる時間ですよ。
マスターソン：舞踏会は楽しかったかい？（立ちあがり、背伸びなどをする）
エドナ：ええ。（ひじ掛け椅子に向かう）
マスターソン：踊り疲れただろう？
エドナ：かなり疲れたわ。
マスターソン：混んでいたの？
エドナ：そうねえ、いつも通りね。
マスターソン：スミッソンさんは、早く帰ってもらったんだろうね？（ひじ掛け椅子に向かう）
エドナ：ええ、そうよ。私はアーノルドさんご夫妻に車で送ってもらったの。（中央部左側にある肘ひじ掛け椅子に座り、タバコを吸う）
マスターソン：タバコはやめた方がいいよ。
エドナ：頭が硬いのね、お父様。みんな吸っているわ。十二歳からずっとよ。実を言うと、学校で覚えたんです。
マスターソン：高い学費を払って、そんなことを勉強していたのかい。

エドナ・そうよ。それとその他のこともね。（警官が家の外から笛で合図をする）警察だわ。（玄関のベルが鳴る）私が行きますわ。

マスターソン・こんな時間に女の子が、玄関に出てはいけない。私が出るよ。

エドナ・使用人たちはぐっすり眠っていると思うわ。ベルが鳴っても構わないよ。きっと誰かが家を間違ったのよ。（マスターソンが廊下を通って玄関に出る）

警察官・（玄関口で）夜分に大変申し訳ありませんが、ある女をつけてきたら、この家に入ったんです。その女はこの家の玄関口の鍵を持っていて、中に入り込みました。ちょっと軽率な行動をとったので、捜しているんです。

マスターソン・そんなことはありませんよ。あなたが追っている女が、この家の鍵を持っているなんて考えられないことです。

警察官・だけど、確かにこの家に入ったんです。

マスターソン・そんなこと絶対にありません。こんな寒いところに立ってやいられません。自分で調べたいのなら、お入りなさいよ。（玄関から中に入る。警官とフランク・バートという男が続く）本当にまあ、一体どうしたことですか？

警察官・新しい法律が施行したので、下町にある下宿屋やレストランを見張っていたんです。

今晩、個室付きのあるレストランを強制捜査したんですよ。捜査令状を持参して、そこにいるすべての人たちを警察に連れて行くことになっていたのです。この若者と同伴していた女を連行したのですが、その途中に男が何かにつまずいて足をくじいてしまったんですよ。そのすきに、女が逃げてしまいタクシーに飛び乗ってしまったんです。女の顔は見なかったのですが、毛皮の服を着ていました。流行の服を身にまとった、相当なお嬢さんだろうね。私はこの男と一緒に別のタクシーに乗り、その若い女のあとを追いかけたんです。彼女はこの前のところで降りたんですが、我々の乗ったタクシーはこの先の方まで行ってしまいました。女のあとを追いかけたんですが、この家に入ったのをこの目で見たんです。神に誓って、断言できます。

エドナ：目撃者の側にいる者が、神に誓って断言できるとは論理の飛躍ですわね。気が動転して間違ったタクシーのあとを追いかけたんでしょう。

警察官：（冷静にエドナを観察した後、バートを見る）もしかしたら！

マスターソン：なんということを言うんですか！考えすぎですよ！　この家には、ずっと娘と一緒にいたんですから。

警察官・（エドナをじろっと見つめ、バートを問い詰める）あそこにいらっしゃるお嬢様と会ったことなど、まさかないだろうな。

バート・とんでもございません！

マスターソン・（唾を飛ばしながら、怒りに震え、娘の容疑を強く打ち消す）ばか者めが！　私の娘が警察の追跡している女だとでも思っているのか？　自分の職を賭す覚悟だろうな？　貴様はいったい誰様の邸宅にいるのか知っているのかい？　私はジョン・マスターソンという者だ。

（舞台右手にあるドアーに駆け寄る）神様、この世の中は、いったいぜんたいどうなっているんでしょう？　自分の家で罪のないことで、辱めをうけるなんて。

警察官・（態度が一変する）旦那様を侮辱するつもりなんか、まったくございません。きっと私どもの勘違いでしょう。ここが、かの有名なマスターソン様のご邸宅であるとは知らなかったものですから。誠に申し訳・・・

バート・かなりの時間、ご迷惑をおかけしているのではありませんか。もう失礼しましょうよ。

マスターソン・そうだとも。それに、売春宿からやって来た見知らぬ人たちを家に入れて、世間体が悪いよ。このようなことが続くと、あんたには昇進ではなく停職が待っているぜ。

（テーブルのあるところまで進む）そこの若者よ、あんたにも今日のことが教訓になったんじゃないかな。それでは、これで失礼するよ。犯人がどんな娘か見当がつかないが、その自堕落なあばずれ女を早く捕まえなよ。だが警告しておくが、社会的地位のある人の家に押し入って犯人を捜そうなどとは思わない方がいいぞ。（警官が立ち去ろうとするが、あることを思いだし玄関口に立ち止まる）

警察官・ああ、その女ですがね、不注意にもこれを落としていったのですよ。（マスターソンに宝石入りのブローチを見せようとする。彼は玄関口までやって来て、それを手に取り裏表をじろじろと眺める）　高価なものなんでしょうね。

バート・俺と一緒にいた女が、それを落としたとは限らないよ。

警察官・その女が落としたことは間違いない。確証があるんだ。その女のドレスから落ちるところを見たんだから。名と購入日が、ブローチの裏に彫り込まれてあるよ。最近買ったばかりのもので、もったいない気がするな。

マスターソン・うーん、そうだね。たいへんもったいない。高価なものでもあるしね。そのお嬢さんは、これに懲りてもっと気をつけるだろうな。とても興味深いお話をありがとうご

ざいました。ところで、その落とし物はどうなさるのですか？　新聞の落とし物欄に掲載されるまで、保管されるんでしょうね？

警察官：はい、そのとおりでございます。

マスターソン：それから、どうなさるおつもりですか？

警察官：明日の朝、この男の尋問をしますが、同席していた娘さんについては、落とし物などを含めた情報が新聞に載るまでそのままでしょうね。ですが、彼女は残念ながら私に軽率なあやまちをしてしまいました。ですから、できれば明日の朝にでも、警察裁判所を開催してその女性についての証拠を提出するのが私の職務だとも考えています。

マスターソン：でも、それは可能ならば、ということですよね。そのお嬢さんが逮捕につながる軽率なあやまちをおかしたのなら、こんなところに突っ立っていたって何にもなりませんよ。女性が高い身分の方であるとお考えのようですが、そのような人がスラム街をふらついているとは思ってもいませんでした。

警察官：このような小さな事件で、本通りから各界の名士たちが逮捕されているのをご覧になれば、きっと腰をぬかされることでしょう。

マスターソン：今晩は、事件の詳細をお聞きして、とてもびっくりしましたよ。それでは、これ

で失礼します。何もお役にたてなくて、申し訳ありませんでした。私と娘は舞踏会に行っていて、あなた様が玄関のベルを鳴らされる直前に帰宅したのです。でも、あたりには誰も見かけませんでしたがね。おやすみなさいませ。

警察官：（中央の玄関口を出ようとしたが、振り向く）あのー、ブローチをお返しいただけますか？

マスターソン：ああ、そうでした、ブローチでしたね。（警官にブローチを渡すと、彼はエドナを疑り深い目で見ながら、玄関口を出て行く）

（マスターソンは二人を玄関口で見送り、中央の玄関から家に入る。そして、静かにすすり泣いているエドナを前に立ち、見おろす）

マスターソン：あれは、おまえの誕生日にあげたブローチだね。いったい、どこでその男と知り合いになったんだい？

エドナ：（まだすすり泣いている）

マスターソン：（娘のところに歩み寄る）返事をしなさい。

エドナ：この部屋です。

マスターソン：ええ！　いったいその男は何者なんだい？

エドナ：電話の修理にやって来たんです。

マスターソン：電話の修理屋だって？　何とま

あ！　それで？（中央のドアの方に向かう）
その男といつ頃出会ったんだ？
エドナ：三ヶ月前になりますわ。
マスターソン：それ以来ずっと付き合っているのか？　（エドナは泣きじゃくる）
マスターソン：答えなさい！
エドナ：はい、そのとおりです。
マスターソン：私の娘ともあろう者が、信じられない！　おまえは王女のように育てられ、目に入れても痛くない存在なんだよ。（舞台右側のドアに向かう）私はおまえのために、昼夜を問わず人夫のように身を粉にして働き、徹夜で資産を増やそうと考えていたこともある。（舞台中央へ進む）このような形で私の顔に泥を塗ってくれようとは、思ってもみなかったよ。おまえが幸せで、願いもすべてかなえられているということだけを生き甲斐にしてきたのに。また、ジョン・マスターソンの娘で莫大な財産の相続人と言われ、皆の羨望の的になってうれしいと思っていたよ。財産をもとに貴族の肩書きを得ることが、私の夢でもあったんだ。おまえは私の誇りであり喜びのもとでもあったんだけど、もうそれも灰のように消えてしまったよ。おまえはいったい何をしているんだ。電話の修理屋と下品なことをし、下町の売春宿でその男と逢い引きを

し、警察の手入れで逮捕され、警察官に自宅まで追いかけ回されている。（舞台中央のポーチに向かう）でもこのことは、いつなんどきばれるか分りゃしない。新聞社の連中にでも知れわたったら、もみ消すのに相当な金がいるんだぜ。（舞台中央のドアのほうに行く）なんでこんなことをしでかしたんだ、言いなさい。

エドナ：充実した毎日を送りたかったの。

マスターソン：充実した毎日を送りたかっただと！　そうじゃなかったとでも言いたいのか？　おまえを育てるのに、とてもお金がかかっているのを知らないのか！

エドナ：そのことが問題なのよ。お父様は、目先の損得勘定にとらわれているんじゃありませんか！　物を売ったり買ったりして、利益を得ることだけを考えておられるのでしょう。興味があるのは、馬や家、土地、株式、債券、肩書きと血縁関係、それも自分の肉親の幸せだけじゃないですか。資産を増やすことに熱心すぎて、お父様の身内（みうち）の女性たちが生身の人間であることをお忘れになっていらっしゃるのではありませんか。私たちは、お父様の成功物語を世間に広めるために宝石を身につけている道具にすぎないのですわ。

マスターソン：おまえの願いは叶（かな）えられていない

のか？（娘のそばに近づく）

エドナ：そのことも大問題なんですわ。願いが叶えられていないどころか、願いが叶えられすぎている生活をずっとしてきたんです。（立ちあがり、長椅子のあるところに向かう）お父様は私を甘やかせて、私が望むものならなんでも買ってくれたわね。だから私はずっと激しく泣き続ければ、たとえ月でさえ手に入れられるんじゃないかと錯覚するようになったのよ。（長椅子に腰をかける）私は他の資産家のお嬢様と同様に、この病的な図々しさというものをもって世の中に放り込まれているから苦しんでいるの。

マスターソン：病的な図々しさだって！

エドナ：そうよ。私の教育に責任がある親が、私を我がままに育てたから困っているのよ。このことは私が生まれる前から始まっていることだわ。

マスターソン：それはおまえが学校で学んだ戯言（ざれごと）だろう。（エドナの方に向かう）

エドナ：違います。これは私の人生経験から学んだことですわ。（舞台の右側に向かい、椅子に座る）私は生まれつき神経衰弱に罹（かか）っており、他の資産家のお嬢様方と学費がとてつもなく高い学校に通わされたね。私たちは皆、どうしようもない時代遅れになっていることに気

がつき、好奇心の塊になったわ。いらいらした神経が大声で新しい刺激を求めて、裏の世界で未知のことを知ろうと必死になっているのよ。

マスターソン・そんなバカな！

エドナ・資産家のお父様方が与えてくれたお金は、過度の自由を増長させるだけに過ぎなかったのよ。だから私たちはいつもタバコを吸ったり、小遣いでアルコール入りのお菓子やお母様方が読んだら顔を赤らめるような小説を買ったりしていたの。また、お父様方が今日の会員制クラブで話すのも気が引けるような話もするわ。このようなことを学校で体験し、病的な図々しさを持ったまま社会人になったってこと。そして、私たち資産家のお嬢様は、刺激を求めて飲食をしたり、ダンスやタバコを楽しんだり、こういうことを身が破滅するぐらいまでやってしまうのよ。男の人を喜ばすように、派手な服を着るようにもなるわ。みだらな中年の男性や好色の若者が耳元でささやく、言葉にできないような話にも、ゲラゲラ笑いながら聞き耳を立てるのよ。このように、私たちはだまされやすい女になり、いつも身を破滅させるような運命に突き進んでいるのです。

マスターソン・そんな大げさなことには、笑いが

止まらないよ。

エドナ：それは紛れもない事実ですわ。

マスターソン：（娘のいるところに進む）おまえは王女になるような娘に育てたつもりが、今や売春婦になりさがってしまったわけだが、いったいこれからどうするつもりかね？

エドナ：私は売春婦ではなく、愛する人に無償の贈り物をしているつもりなの。

マスターソン：普通の労働者階級の人かい。

エドナ：そうよ、ありがとう！

マスターソン：でも、下品な関係を続けるより、自分でいい人を見つけたらどうだね。

エドナ：どういうこと？

マスターソン：人並みの結婚をしなさい、と言っているんだよ。

エドナ：私と同様の神経衰弱患者との結婚をもたらす「下品な関係」が、必ず人並みの結婚に結びつく、とはどうしても信じられないわ。好きな人と人並みの結婚をすれば、私は資産家のジョン・マスターソンの娘として皆から羨（うらや）ましがられ、誰かの奥さんとして羨ましがられ尊敬されるということ？

罪深い肉体関係が神聖な結婚につながるとは、到底思えないわね。（腹の皮がよじれるほど、大声で笑う）（舞台の右側から下に降りようとする）

マスターソン：おまえは社会に対する責任を学校で習わなかったのかい？

エドナ：そんなもの、まったく勉強しなかったわ。私を世の中の名士にするために多額のお金が遣われたわけだけど、学校の授業で先生方はそんなことにはまったくふれなかったわよ。（舞台左側に向かう）習ったことと言えば、自分を喜ばせることだけ。お父様が支払った大金は、私が社会に対する責任を考えることには結びつかなかった、というわけよ。

マスターソン：（娘の方に歩み寄る）おまえのことを、ちっとも分かってあげられなかったな。

エドナ：お父様がお金儲けに費やす時間をもう少し減らしていたら、私のことを分かってもらえたかも知れないわね。子どもの頃は、お父様のことをいつもちょっと怖がっていたのよ。

マスターソン：お父さんを怖がっていたとは驚きだな。

エドナ：お父様は私にとって王様だったのよ。一度も父親にはなってくれなかったわ。（マスターソンは長椅子に向かう）小さい頃よく乳母（うば）と一緒に郊外にドライブに行ったの。そこには花が咲き乱れ、輝くような小さなお家（うち）があって、子供たちが元気に遊びまわっていたのよ。ときには、街角にありふれた路面電車が走り、男の人が車から降りてくるような光景

に出くわしたわ。お父さんは子供を抱き上げる。すると私と同じぐらいの年齢の幼い子供の一人が、遊び仲間と別れを告げ、ワーイという歓声をあげてお父さんのもとに走って来る。そして、お父さんの髪の毛の中に手をやり、しっかり抱きしめる。すると、質素な白い洋服をきた若いお母さんが玄関で出迎える。旦那さんは奥さんの肩に腕をまわし、家族全員が小さなお家に入る。ああ、この幼い女の子のことを何と羨ましく思ったことか！

マスターソン：羨ましく思うことなんかなかったのに。

エドナ：羨ましく思うことはなかったですって？その女の子のおもちゃが部屋中に散らかり、お父さんが床に寝そべりながら娘と汽車ポッポ遊びに興じている姿が今でも浮かぶわ。そういう気分になりたくて、乳母に頼んで毎日というほどその家の方にドライブに連れて行ってもらったの。そして子供心に、いつの日かそのような小さなお家を持つと決めたのよ。でも、私はいつも、子供部屋の暖炉の前で大きな敷物に寝そべっていた。ひとりぽっちで、とっても寂しかった。大金持ちの家で育つ赤ん坊がとても孤独な気持ちになることを、お父様は想像できないでしょうね。私は違うわ。その寂しさが骨身にしみているのよ！　お父

様が帰ってきたら、勇気を振りしぼって抱きつこう、と考えたこともあったわ。

マスターソン：なぜそうしなかったんだい？

エドナ：お父様が帰宅することは、数えるぐらいしかなかったじゃないですか。それに、優秀なお父様の使用人がどのように思うか、恐れていたの。一度お父様が下の階にある書斎にいらっしゃることに気づき、忍び足で階段を降りていき、ドアの前に立ったことがあるわ。でも、どうしても中に入ることはできなかった。莫大な資産の相続人である孤独な幼い娘が、大広間にあるドアに顔を押し当てて、中に入ってお父様に抱きつきたい、と燃えるような思いを抱いていたのに。小さな家のあの娘が、まさに今頃、お父さんの膝の上で寝そべっているのに、私はとっても不幸だと思ったわ。

マスターソン：エドナ、そうだったとは、ちっとも…　（舞台中央に進む）

エドナ：ちょっと、ちょっと待って、お父様。私の願いを何でも叶えるのが、お父様の生き甲斐であった、とおっしゃったわね。一つだけ聞いてもらいたいことがあるの。（立ち上がる）　お願いだから、私から「資産家のお嬢様」という肩書きを取り払ってもらいたいのよ。こんなものは、いりません。私が欲しいのは、

小さなお家と、旦那様だけです。それと、お父さんに抱きついて出迎えることを怖れない、かわいい女の子も欲しいわ。社会に対する責任なんて、何も知らない。「資産家のお嬢様」には、もううんざりしているの。不幸だし、つまらないし、病的なまでに人間としての温かさがないし。そんなものは、もういらないのよ。これからは、ごく普通の労働者と一緒になって、自分の意思で自分の道を切り開きたいのです。そうすることが、私にとって、唯一の清らかな人並みの正しい生き方だということが分かったの。

マスターソン：おまえを売春宿に連れ込んだ男と…

エドナ：その人がそのような場所で密会したいなどと言いだしたことは一度もないわ。彼と実際に会えればどこでもいいと、私から誘ったのよ。それに、その日には、私と同じようなお嬢様も他にもいたしね。（父親のところに向かう）お父様、お願いだから、その男の人と結婚するのを許して下さい。もちろん、彼が私をお嫁さんにしてくれればの話ですがね…

マスターソン：お嫁にしてくれればはないだろう。その男がおまえと結婚できる幸運に飛びついたんじゃないのか…

エドナ：それはどうかは分からないけど。お父様、

本当にお願いだから、結婚を許して下さい…

マスターソン：おまえの幸せのためなら何でもする気持ちは、今でも変わらないよ…

エドナ：それなら、急いで警察に電話してよ。牢屋から彼を出してよ、今すぐ。警察を買収して、彼を無罪にすることぐらい、朝飯前でしょう。お父様は、資産家で名士のジョン・マスターソンなんだから、警察に対してでも、何でもできることを証明してよ。急いで、急いでったら！

マスターソン：でも、そんなことはできないよ。そんなことをしたら、おまえが幸せにはならないことは明からだ。

エドナ：本当にそうしてもらえないの？

マスターソン：その通りだ。ばかばかしい。

エドナ：（外套を持ち出し、ドアの方に向かう）

エドナ：お父様が評価しておられるこの腐りきった社会が健全であるとおっしゃるなら、私はどうかしているんだわ。

マスターソン：おまえが正しいというのなら…

エドナ：私が正しいことをどのように…

（電話が鳴り響く）（マスターソンが電話に出る）

マスターソン：何？　何だと！　男が銃で自殺をしたって！　午前三時にどうしてそのことを知らせるために、私に電話してきたんだ？

娘の手紙がその男のポケットから出てきた？
そんなことは、ありえないことだよ！　私の娘はそんな男のことを知っているわけがないだろう…

エドナ：お父様。フランクが自殺したの！…

エドナ：（異常な笑い声を発する）お父様、もう警察を脅かすことは必要ないわ。「自堕落な資産家のお嬢様」という肩書きを私に与えてくれたんだから。（仕切り用のカーテンを引きちぎりながら、失神して倒れる）

幕